# コナーと60の
# ウキウキハッピーダイアリー
## ～お互い素直になれるまで～

# コナーと60のウキウキハッピーダイアリー　～お互い素直になれるまで～

## オリゼ

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=23124678**

DBH【腐】, RK1600, 6051

コナーくんと60くんが素直になってキスするまでのお話です。
ハンクとカムカムがただのお節介おじさんと化しました…。

前の話→illust/118486230

最初から順番に読むにはこちら
1、小説　novel/22114602
2、漫画　illust/118486230
3、小説　今ここ
4、漫画　illust/122977367

# Table of Contents

# コナーと60のウキウキハッピーダイアリー　~お互い素直になれるまで~

「ははっ！あははっ！くすぐったいよファイブ」
「お前んちの子はやんちゃだな、もっとちゃんと躾けないのか？」

引っ越しの為に荷物の荷解きをしていたコナーと60。二人は小さな家族とのふれあいの時間を確保するため一旦作業の手を止めていた。

「これで良いんだ、この子は……きっちり任務をこなすタイプには育てたく無い」
「……」

コナーは少し哀愁に満ちたような表情を作って見せる。コナーはついつい自分の愛犬ファイブにCL社に命令されるがままに任務をこなしていた頃の自分を重ねてしまっていた。自分と彼の似ている部分なんて顔がキュートなところくらいなのに……この子には自由にのびのびと過ごして欲しかった。その答えを聞いた60も眉尻を下げながら少しだけ口角を上げて微笑む。

「君こそシックスはどう育ててるんだい？」

60の足元に自身の体を擦り付け尻尾をご機嫌にゆらゆらと揺らすシックスを見ながらコナーは尋ねた。

「ふんっ！見ろこの気品を…初めはまぁ結構暴れ回ってたんだがな、僕が何か言わなくても自然と落ち着いたんだ。僕的にはやんちゃなままでも良かったんだが…」
「その為のル〇バだもんね」
「彼は最近じゃあシックスの乗り物と化してるよ」

前に二人で出かけた際に購入したル〇バを60は自室で常に稼働させていた。はじめこそシックスはその見た事の無いマシンに警戒していたが、無害だとわかるや否や上に乗り自分がこの機械の持ち主と言わんばかりの態度で乗り回している。そして60はその様子を写真や動画で逐一記録していた。もちろん誰にも見せる気は無いが。

「そういえばこの子達用のスペースはリビングにしようと思ってたけど、それで良いかい？」
「ん？一部屋与えるんじゃないのか」
「え？だって僕達が一部屋ずつ使ったらもう部屋は無いよ？」
「………」

コナーと60はお互いの顔を見つめ合いながら頭上にクエスチョンマークを出現させていた。自分たちが借りた家は２LDKだ。つまり個室は2部屋しかない。という事は…？その間0.1秒…そして同時に相手の主張の意味に気づく。

「え！？もしかして……僕達一緒の部屋のつもりだった……？」
「忘れてくれ」

60は今まで見た事もない様なスピードで顔を背け後ろを向いてしまった。
コナーの口元が自然と歪む。

「え！ちょっとちょっと60ったら」
「忘れろ！このっ…！！ばかっ！」

コナーは60の顔を覗き込もうとし、60はそれを避けるのでお互いにその場でぐるぐると回っていた。二人の楽し気な空気につられて足元でファイブも嬉しそうにスキップする。

「え〜〜〜！！ふふっ……60がその気なら良いよ」
「……本当か」
「うん」

「結構狭いかもしれないぞ……それでもか……」
「君との距離が近くなって僕は嬉しいよ」
「……じゃあ、そうする」
「決まり！では荷物整理の再開をしよう！」
「ワンッ！」

コナーと60と小さな家族2匹はお互いを茶化し合い、笑い合いながら満たされた心持でその日1日を終えた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「よお、コナー、どうだ新居は」
「中々良い感じですよ、ハンク」

最近ではもう当たり前のようにハンクは朝から出勤している。デスクに到着し荷物を机に置きながらここ何日か様子が気になっていたことをコナーに尋ねた。コナーもよくぞ聞いてくれましたと言わんばかりのにこやかな表情でそれに応える。近頃すっかり自然に表情を作れる様になったなとハンクは思った。

「少し大きめの家を借りたんだろ？1人一部屋使えるし結構快適だろ」
「それが、60の提案で2人で一つの部屋を使う事になりまして」
「おお……そりゃ、思い切ったな」
「もう一部屋はファイブとシックスの部屋にしたんです。何かおかしいでしょうか？」
「あ？まぁ、良いんじゃねぇか？」

二人はまぁ、そう言う仲だし別に変なことじゃないよな、と思いながらハンクは頷く。

「まぁ、僕らは立ってスリープできますし、正直そんなスペースは必要ないんですよね」
「ん……？ベッドは無いのかお前らの部屋に」
「無いですが」

ちょっと話が変わってきたな。

「おま……いや、すまねぇ、俺が悪かった。ちなみにお前らどこまで行ったんだ」
「と、言いますと？」
「お前らの関係だよ、ほら、一緒に住む事にしたくらいだ、色々あるだろ」
「……色々」

コナーは少しの間考え込む。その様子にもどかしくなったハンクは直接的なことを聞いてみた。

「ほら、2人でよ、例えばキスとか」
「キス？人間同士のあいさつや恋人達が親密な間柄でやるあれですか」
「そうだよ」
「特には」
「っっっ！！！！あ"〰〰〰〰！！！」

声には出ないハンクの叫びが署内にこだました。朝早い時間だったので署の3分の1くらいの人数に聞かれるだけで済んだ。クリスは苦笑いしながらこちらを見ている。

「もう良い……お前はそのままで……」
「どうしたんですか」
「ちょっと60の方にヒヤリングするか……」
「僕じゃダメなんですか！なんなんですか！」
「お前は！そのままで！いい！」

詰め寄ってくるコナーを片腕で押さえ距離を取りながら、もう片方の腕で頭を抱えてため息を付いたハンクなのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ったく……これだからパピーちゃんはよ……」

ﾄｩﾙﾙﾙﾙ…

『よぉ、60、急に電話してすまねぇな』
『いえ、なんのご用件でしょうか、警部補』

ハンクは昼休みに一人で——コナーも付いて来ようとしたが無理やり置いてきた——なじみのチキンフィードに昼食を食べに来るついでに60に電話をかけていた。

『いやな、コナーの事なんだが』
『……はい』
『お前は自分とコナーの関係をなんて表す？』
『えっ……』
『あいつには言わねぇから言ってみろ』

少しの間60からの返答が止まる。
ハンクは静かに60の返事を待った。

『……こ、恋人……ですかね……』

60は少し照れたような声音で答えた。その返答にハンクはため息を吐く。

『だよなぁ……俺はお前を不憫に思うよ』
『僕は特に不幸ではないですが』
『いや、そう言う意味じゃねぇよ。あいつは人タラシな割には中身が産まれたての坊やと来たもんだ、お前も苦労してるだろ』

ハンクにはコナーの精神は周りが思っているよりもずっと幼いのではないか？と思う時があった。それをピュアと言うのかもしれないが…今回に関してはコナーにはもう少し大人になってもらう必要がある。

『そ、そうですね……コナーの振る舞いには少し困る時があります』
『お前がグイグイ行かねぇと何にも進まないぞ』
『そんな事はありませんよ』
『ほう？』

ん？自分が知らないだけで二人の関係は意外と進んでいる？

『コナーにはドキドキさせられっぱなしですが……先日僕から提案して2人で手を繋いでスリープしたんです……！これはもう、恋人としてかなり進んだんじゃないでしょうか！？』
『こっちも同レベルだったか』

余計なおせっかいだとはわかっているが、ハンクはまた大きなため息を吐いて頭を抱えた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

コナーと60は自宅のソファーでくつろぎながらお互いに今日あった

事をあれやこれやと報告し合っていた。ふとコナーが思い出したように話題を切り替える。

「そう言えば、『とりあえず立って寝るのはやめとけ！ベッドで寝ろ！』ってハンクに言われたんだが、どうする？」
「どうするとは」
「僕達の部屋に2人分のベッドを入れるとかなりスペースを取るだろう？サイズとか色々考えないと……」

コナーからの提案に60は昼間ハンクから来た電話の事を思い出した。ハンク的には自分たちの関係はあまり進んでいるとは言えないらしい。ならば…。

「……一つのベッドじゃダメか」
「え？」
「ただ横になってスリープするだけなんだ、大きめの一つのベッドでも事足りるだろう……？」
「う〜ん、確かに、それもありかなぁ……」
「……」

コナーは悩まし気に唸った後ちらりと60を見た。60は少しもじもじした態度でこちらの様子を気にしている。その様子に自然と口角が上がる。

「まぁ、距離が近ければこの前みたいに、手を繋ぎながらスリープし易いしね？」
「なんだその顔……ニヤニヤしながら言うなよ……！」
「ふふっ僕は嬉しかったって事！じゃあ適当なサイズのベッドを注文しておくよ」
「……頼んだ」

二人はクスクスと笑ってその後も何かとお互いに茶化し合いながらそれぞれ明日の準備を終えてスリープモードに以降するのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「さて何をしようかな……」
「はふっ！」
「ん？」
「ワンッ！ワワンッ！」
「よしよし、そうだねファイブ、今日は君といっぱい遊ぼうか！シックスもおいで！」

今日はコナーだけ非番の日だった。60がおらず少しだけ広く感じる家の中をふらふらと歩いていると、その暇を持て余した様子を察知したファイブはすかさず自分のご主人に遊んで欲しいとアタックをかけた。コナーはそれに快く応じる。

「お座り、お手、待て」
「……」
「……………よし！」
「ワンッ」
「うんうん、君もすっかりお利口さんになったな」
「ﾆｬｱｫ……」
「ごめんごめんシックス、ブラッシングだね、ちょっと待ってて」

いつもは60にベッタリのシックスも今日は寂しいのかコナーに構って欲しいアピールをする。60もこれくらい素直になってくれたら良いのになとコナーは思った。まぁ最近は比較的素直に気持ちを伝えてくれている方ではあるが…。

「ブラシはこの棚に……あっ！」

ファイブとシックスの物を色々と収納している棚からブラシを探

す。その際に机に置きっぱなしになっていた郵便物の紙束に体がぶつかり地面にばらまかれてしまった。

「仕分けするのを後回しにしていたんだった……これは近くのスーパーのチラシ、こっちは光熱費の請求、こっちは……

『［大人のアンドロイド同士の付き合い方］
相手とのコミュニケーションは大丈夫？
パートナーを満足させる3つの方法教えます
有料メールマガジン配信中！』

デジタルコンテンツの広告か……」

アンドロイド向けの広告は意外と紙で送られてくることが多い。デジタル配信だとブロックされる可能性があるからだ。コナーはその広告を見てしばらく考え込む。

パートナーを満足させる……ハンクにも言われたけれど……僕達は今の関係性で充分満足してるし……別に大丈夫だよな……？

「60と一度ちゃんと話してみるか……」

コナーはその広告をそっと棚の引き出しの中へしまった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

コナーは仕事帰りに買い物をしつつ少し遅めの時間に帰宅した。みんなもうスリープする準備をしてしまっているかもしれない。スマートな手つきで玄関ドアを開けつつ家の中へ入る。

「ただいまみんな！60、頼まれた物を買って…
ワァーーーー！？！？君、今、下着を履いていなくなかった
か…！？」
「ん？何かおかしいか」

ドアを閉めて部屋の少し中の方にいた60に目を向けたコナーは見て
しまった。彼が素肌にそのままパジャマのズボンを履くところ
を……。

「今までずっとそうしていたのか……？」
「外から見えないんだから必要ないだろう。僕たちは人間と違って
排泄機能も付いていないんだし…」
「そ、それはそうなんだが……ハンクに下着を履かないのは恥ずか
しい事だって教わってからは僕はずっと履いているよ」
「……警部補に教わった？」
「うん」
「下着を履いていない事を指摘されるなんてどんな状況だ！？君は
警部補に着替えを見られる様な状況下にいた事があるの
か！？！？」

それまで非難される側だったので大人しくコナーの意見を聞いてい
た60だったが、コナーの一言で態度が一変する。LEDも赤と黄色を
行ったり来たりしていた。

「何を怒ってるんだ？！違うよ！！前に僕の私服について聞かれた
際に持っていないと答えたらさっきの事を言われたんだよ……」
「そうだったのか……」

60が握りしめたこぶしを緩めLEDもくるりと黄色から青に戻る。

「怒りは治ったかい？」
「いや、怒っていた訳ではないさ、ちょっと……」
「ちょっと……？」

「と、兎に角履けば良いんだろう！買ってくる！」
「わざわざそこまでしなくていいよ、僕のを貸してあげる」
「お前のやつを！？お前変なところでそういう……！！！恥じらいって物はないのか……！！」
「君が言うのかい？」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「60、ちょっと話があるからこっちに来てくれ」
「なんだ、改まって」

それはコナーと60がお互いにシャワーを浴びパジャマに着替えてもうスリープするだけという状態になっている時だった。ベットにゆるく腰かけたコナーが問いかける。

「……君に聞いておきたいんだが、君は僕達の関係性って……なんだと思う……？」
「関係性……」

コナーは改まった様子で60の目を真剣に見つめる。60もコナーの目を見つめつつ隣に腰かけた。

「相棒？親友？家族？それとも」
「……51、お前の意見を先に聞かせてくれないか」

60はいつもより気持ち眉間の皺を緩ませつつも真っすぐにコナーを見つめている。

「僕の？僕はそうだな……僕たちの関係は一言では言い表せないと思う。親友の様であり、兄弟の様であり、そして強い絆で結ばれた

唯一無二の……世界が僕らを祝福している、そんな錯覚を覚えるようなベリーハッピーな関係だ」
「……」
「君はどうだい？」

コナーの意見を聞いた60は一度を目を瞑り下を向いていたが、すぐに瞼を上げてまたコナーの目を見つめ返す。

「……僕の場合は君との関係を端的に言い表せる。君は僕にとってかけがえの無い人生の大切なパートナーだ、コナー」
「……また…こう言う時だけコナーって呼ぶのずるいよ」
「ふっ僕は卑怯なんだ」

コナーは照れたように微笑み、それに60も柔らかく表情を作って微笑み返す。

「そんなストレートに言われたら……はぁ、では君は僕を恋人と思っている？」
「そうだ」
「……つまり人間達がやっている様な事を、したい？」

一瞬二人のLEDが同時に黄色に点滅する。

「……したく無いと言えば嘘になるな。君と深く接続するだけでも満足できるが、それ以外の方法でも君を知る手段が欲しい」
「……まぁ、そうだな……これはマーカスとノースもやっていたんだが、手始めにキス？とか、どうかな？」

ﾋﾞ---------!!!

夜遅い時間、もう夜中の1時にはなろかという時間にハンク宅に玄関のブザー音が響き渡った。事前に連絡を受けて来訪者の存在を知っていたハンクはそのまま玄関のドアを開ける。

「こんにちはハンク、しばらくお世話になります」
「お、おう…よく来たなコナー、ファイブも一緒に来たのか」
「ワン！」
「スモウ！元気だったかい！よしよし、相変わらずふわふわだな……君はファイブの遊び相手になっていてくれるかい？」
「ハフッ」

コナーはあまり身支度をちゃんとせず家を飛び出して来たようで、その身なりはかなりちぐはぐだった。部屋着のスウェットに仕事用のコートを羽織り、手に持ったカバンの中にはいつもの制服やファイブ用のブルーブラッドなどのおやつ類が雑に詰め込まれている。あと、終始LEDが黄色のままだ。

「まぁ、荷物はその辺に置いておいていいぞ」
「ありがとうございます」

身なりのちぐはぐさに合わぬ丁寧な所作でコナーはソファーの横に待っていたカバンを置いた。

「とりあえずまぁそこ座れ……で、何で喧嘩になったんだ？」
「……」

コナーは今までにこやかな顔をしていたがハンクのその言葉で一気に表情を歪ませる。その表情からソーシャルモジュールを搭載していないハンクでも容易に怒りと悲しみの感情が読み取れた。

「急に今からうちに泊めてくれなんて言われてびっくりしたぞ」
「それが……」
「うん」

「一度僕達の関係性をはっきりさせようと60と話し合って……」
「うん」
「そして僕達は恋人関係にある事が判明したんですが」
「判明」
「……正直に言います、僕には60に恋人だと思って貰えているという打算がありました。なのでそう答えられたら僕は彼とキスしてみたいと思っていたんです」
「おお」
「だから提案したんです。してみないか？と……そうしたら彼なんて言ったと思います？『キスで得られるメリットを50単語以内で説明して欲しい』ですよ？！！？」
「おいおい……」

コナーは言葉の勢いのままソファーの前に置かれているローテーブルを平手で叩いた。

「ですよね！？雰囲気も何もあったもんじゃないですよね！？だから彼に反省してもらうために僕はあの家を出て来たって訳です」
「はぁ〰〰〰痴話喧嘩に巻き込まれる俺の身にもなれ」

ハンクはソファーに深くも垂れかかり仰け反って上を向いた。

「すみません……」
「面白いから許す」
「ありがとうございます！ハンク」
「まぁ、ゆっくりしていけ、スモウも喜ぶしな」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ビ゛ーーーーーーーーー!!!

コナーがハンクの家に訪れた次の日。60もハンクの家のブザーを適度な長さで鳴らして家主を呼び出した。

「よぉ、60よく来たな」
「警部補、ご無沙汰しています」
「コナーに会いに来たんだろ？だけどあいつは会いたくないらしいぞ」
「……ですよね」
「……丁度スモウの散歩の時間なんだ、一緒に来い」

ハンクは60をそのまま家の中には入れず、共に散歩に出た。

「コナーが言うにはお前は雰囲気をぶち壊したらしいな？」
「……はい」
「なんでそんな事言ったんだ」

隣で歩く60は少し俯いて地面を見たまま答えた。

「僕もわかっていたんです、彼が望んだ事をそのまま実行すれば良かったんだって。でも……彼の期待は僕には重すぎた」
「んだよキスくれぇで」
「たかがキス、されどキスですよ……僕はキスなんてした事ない！だから上手くできないかもしれない！もしキスに期待した効果が無かったら？彼は幻滅するかもしれない……それが理由じゃ、ダメですか……」

60は下を向いていた顔を勢いよく上げてハンクを見つめながら叫んだ。しかし言葉と共に振り上げた手は次第に力無く降ろされていく。

「……お前は臆病すぎだぞ」

「僕は臆病ですよ。だから常に準備を怠らないし、任務を成功させるんです。でも彼との関係は……任務じゃない……僕は……」
「はぁ……まぁ、そんな重く考え過ぎるなって、その内コナーからお前に会いに行くだろうからまた話してみろ」
「……はい」

その後二人はコナーの話はしなかった。残りの散歩コースをゆっくりと歩き、たまに景色に訪れるささやかな事柄に反応し他愛もない会話をしつつもお互い帰路に就いた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ハンクの家に居候して数日、コナーは非番のタイミングを使ってとある家を訪れていた。コナーにとってはあまりいい思い出が無い、しかし耳障りではない軽やかな玄関チャイムを鳴らしてドアが開くのを待つ。玄関の施錠が解除され、開けられたドアの内側から金髪の女性型アンドロイドが顔を出した。

「こんにちは、クロエ」
「ようこそコナー、あちらでイライジャがお待ちです」

クロエに案内され過去に一度訪れたことのある大きな赤いプールのある部屋に入る。そこでは相変わらず数人のクロエたちが優雅に水遊びをしていた。自分を呼び出した家主は座っていたソファから立ち上がりこちらに自ら歩み寄ってきた。

「やぁ、コナー、久しぶりだね」
「……あなたが僕を呼び出すなんて、何が目的なんです？」

コナーは怪訝な態度を隠そうともせず、顔と声に感情を乗せて答え

た。

「そう警戒しなくても大丈夫だよ、とある子から君が面白い状況になっていると聞いてね」
「……」

とある子、カムスキーがそんな風に呼ぶ人物とは…？

「君は同型機と付き合っているそうじゃないか」
「……そうですが」
「いや、そんな顔をしないでおくれ…私はむしろ君たちを応援しているんだ、アンドロイド同士の恋がどの様に進んで行くのかに興味があってね。必要ならパーツの換装も承るよ？」
「……その発言はハラスメントですよ」

コナーは一歩後ろに下がってさらに怪訝な表情を強める。

「ははっすまない、つい癖でね…まぁ冗談はさておき、先ほども言ったが、とある子に相談されているんだ…君たちの喧嘩をなんとかしてくれってね。滅多に私を頼らない子だから協力してあげたいんだよ」
「誰の事かはわかりませんが、お節介な…」
「君も可愛がっている子だ、許しておやりよ」
「……」

僕が可愛がっている子…もしやRK900か？知らず知らずのうちに心配をかけてしまっていたようだ。

「とりあえず今回の件は君が折れれば解決すると思うよ」
「そんな事は自分でわかっています」
「では何をそんなに意固地になっているんだい？」

コナーの怪訝そうにしていた表情が一気に曇ったものに変わる。少し間を置いてコナーは答えた。

「……僕が………自分の欲求に素直になれないだけ、かと。本当は僕だっていつまでも彼と距離を取っていたい訳じゃない……」
「じゃあ、何故？」
「……わからないんです」
「ふーむ、そうか。まぁ、私的にはその感覚を大事にして欲しいと思っている。君たちアンドロイドの心の成長には大切な要素だ」
「……否定しないんですね」
「勿論！私は君たちの全てを肯定するよ、創造主だからね」
「……」
「まぁ、一度君の本音を全て聴かせてくれ。私的にも興味があるしね。それから対策を考えよう」

カムスキーは本当にただのお節介心と好奇心から相談に乗っているだけの様で、色々話を聞いたあとは素直にそのままコナーを送り出してくれた。警戒していたコナーはカムスキーの意外な態度に驚きつつも他人に本音を話せたことで少しスッキリした心持で60が待つ我が家に帰るのだった。

「本当に彼らは面白い。そう思うだろう？クロエ」
「はい、実に」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「おーい！どこだいシックス！ご飯の時間だよ」
「ﾆｬｵｯ」
「あ！まったく、そんなとこに隠れて…」

もう21時を回ろうかという時間、60はシックスに与えるブルーブラッドを手に持ちながら愛猫の姿を家の中で探し回っていた。シッ

クスが棚と棚の狭い隙間から顔を出した時、玄関のドアが開く。そこには少しうつむき気味でこちらを見るコナーが立っていた。

「……」
「！……51、おかえり」

60はいきなり近づいたりせず、落ち着いた態度でコナーを迎え入れた。

「うん……ただいま、60」
「……心配したんだぞ」
「ごめん……僕が意固地になってた、謝るよ」

コナーが脱いだコートを60が受け取り壁に掛ける。

「僕の方こそ…君の気持ちを知っておきながら、あんな態度を取ってごめん…とりあえず、ゆっくり話さないか？テレビでも見ながらさ」
「うん」

シックスにご飯を与え終わった60がソファーに座り、ラフな格好に着替えてきたコナーも隣に座る。二人はしばらく無言でテレビを眺めていた。今日は週に一度の映画が放送する日だ。あと数分もすれば始まるだろう。番組が始まる前のCMをひだすら無言で見続ける二人。そんな状況の中コナーがポツリとつぶやく。

「今日の映画…あれだよね、恋愛ものの…」
「ああ、何度か見た事あるやつだな。有名なやつ」
「…あれ見てるとさ、途中のシーンで何だか、お腹の中がこう、そわそわするんだよね」
「わかる、そういうシーンあるな。腹の中のチューブが変な感じする」
「……」
「……」

「どのシーンの事言ってる？」
「……キスシーン」
「……僕もそこ」
「……」

二人の間にまた沈黙が訪れる。
CMも終わり、番組が始まろうかという時、二人は同時にちらりとお互いを見て目を合わせた。コナーは熱っぽく、60は猛るものを秘めた目をしていた。お互い機体の温度がいつもより高い。60はそっとコナーの顔に手を伸ばし、頬に触れた。コナーが一瞬肩を震わせる。

お互いに目をゆっくり閉じて顔を近づけ唇と唇が静かに触れ合った。

二人の正面にあるテレビには映画の冒頭シーンが映されている。海のさざめき、波が砂浜に打ち寄せる音、優雅なBGM…。二人はシーンが切り替わるまでじっとそのまま唇を合わせ続けた。60が少し目を開けると、瞼を小さく震わせたコナーのまつ毛が海の色を反射して光っていた。

美しいな、と思った。

それはコナーも同じだった。60とは別のタイミングでコナーも少しだけ目を開けて60を見ていた。まつ毛に反射する空の青が美しかった。二人は唇を離してお互いにフフッと微笑んだ。映画の中の恋人たちも笑っている。

「キスっていいものだね」
「そうだな。でも多分きっと、まだまだこんなものじゃないんじゃないか？大人のキスってやつは」
「そうだね…やってみる？」

60はリモコンを手に取るとそのままテレビの電源をオフにした。触

覚、聴覚プロセッサの感度は良好。60はコナーの胸に軽く手を当てて力を入れ、コナーは60の首に手を回して引っ張り、お互いにソファの上へと倒れこんだ。

まだまだ夜は長い。